

第1回富山県環境審議会 生物多様性小委員会 議事概要

1 日 時 令和4年7月28日（木）午後2時～3時30分

2 場 所 富山県農協会館 802号室

3 出席者

委員等：和田委員長、遠藤委員、富永委員、有山専門員、石黒専門員、中田専門員、岡田調査員、小川調査員、間宮調査員、道井調査員、吉田調査員（欠席：柳原専門員）

県 側：藤本自然保護課長、牧野自然保護課主幹・課長補佐・自然環境係長、利田自然保護課野生生物係長 ほか

4 議事及び主な意見

（1）富山県生物多様性保全推進プランの改定について

（委員等）GB0※において愛知目標に対する世界での達成状況が出されているが、世界での達成度、国での達成度、そしてその中の富山の達成度を整理したことはあるか。

日本の状況と照らし合わせて富山の状況を示せば富山県の特徴が浮き彫りになるのでは。

※GB0・・・Global Biodiversity Outlook（地球規模生物多様性概況）

（事務局）県では富山県の地域戦略であるプランの目標・指標により達成状況を評価している。その他の評価については設定していない。

日本の達成状況も十分に把握し、県の達成状況も精査しながら、今後の改定につなげていきたい。

（委員等）国の指標も見えていただきながら富山県の地域の特徴的な自然景観や特色を生かした形の地域戦略がのぞましいのでは。

（委員等）生物多様性の認知度について、令和3年度の状況でも目標75%に対して37%と、浸透には足りない状況。幼少期から自然環境の中、或いは施設を利用することで生態系ごとの生物多様性を感じられるのでは。例えば小学校の遠足等で必ず多様な自然環境の中や施設、例えば海なら魚津水族館、田園風景や里山なら自然博物館、県内には生態系ごとに適した施設があるのでそれらに必ず行っていただくようなプランニングを織り込んでいく必要があるかと思う。そうした自然にふれあう機会により自然と生物多様性を意識できるのではないか。

(委員等) 日常の生活の中で生物多様性を感じることはなかなかなく、生物多様性は普通の人には理解しにくいものではないか。

富山は日本の中でも非常に稀有な自然の豊かさがあるが、住んでいる人はこれが当たり前になっていて、気が付いていないのではないか。県の自然の豊かさを伝えていき、改めて気が付いてもらうことが生物多様性の認識につながるのでは。

(委員等) 生物多様性だけを前面に出してもなかなかわかりにくいので、自分たちができる切り口を具体的な行動で進めていくことや、理解を得ていくということが必要かと思う。

富山県の特徴を出すというのは非常に大事なこと。富山の中の自然の流れ、雨、雪、川、海など水が循環していく姿をイメージしてもらうようなプランにしていければ、富山らしさが出てくるのでは。

プランの推進体制にあるように、それぞれの役割を分担していくこと、例えば一般の人は自分のできるボランティアに参加する、民間事業者が行っている自然資本経営に対する評価や環境勘定（ESG投資や企業の自然資本金会計など）の評価を行えばもっと進めていけるのでは。

(委員等) グランドデザインというイメージマップも作られるということが書いてあるが、川とか水とか雪とかでつなぐような形で、暮らしの中で知っていただくような流れのイメージマップがあれば、住んでいる人がイメージしやすいのでは。

現在のプランにも行動計画の地域別の行動リストが地域区分ごとにあるが、地域で切り離すというよりは、重複するような流れの行動計画でもいいのではないか。

(委員等) すべてを行政でやることはできないので、民間の取組みを今後いかにうまく活用していくか、さらに活性化していくのか、その辺の協力のあり方っていうのを明確に示していただくといい。

(委員等) これからの再生可能エネルギーの比率を高めるという動きの中で場合によっては、再生可能エネルギーの利用に伴って、自然の立地を失うというトレードオフも起こり得る。ゾーニングをどういうふうにしていくかという視点は大事かと考える。

(委員等) 前回のプランと章立てが変わり、長期目標を置いて、またリーディングプロジェクトという現プランの重点プログラムを前に持って

いくというこのフレームの変更は、どのような考え方によるものか。
(事務局) 国の戦略においても掲げられている長期目標の 2050 年目標を踏まえて設定した。また、目標に対して、先導するものとしてリーディングプロジェクトを、先に打ち出した形としている。

(委員等) 富山県が非常に自然が豊かで、水に恵まれてる地域であるということだが、それが今後危ないのではないかというのが、我々が研究している中で見えてきている。それが要は気候変動であるが、これまでの環境をそのまま使って生物多様性を保全していくというのはもしかしただけでできなくなってくるかもしれない。

今行っている取組みをそのまま続ければいいということではなく、気候変動への適応という観点でも、どう生物多様性の保全を進めていくのか考えて盛り込んでいただいた方がよいのではないか。

(委員等) 気候変動と合わせて、人口が減っていく中、どのように自然の資源を使って保全をしながら生活していくかっていうのがやはり大きな課題だと考える。

(委員等) 福井県の海岸で野生菊を調査しているが、10 年前には大群落だった場所が、一昨年にはシカに食べられて全滅していた。10 年単位で見るとこうしたドラスティックな変化が起きている。(プランの改定に当たっては) 富山だけを見るのではなく、近隣の地域で実際にどのようなことが起こっているのかを把握した上で検討しないといけない。

県内では特定外来種であるオオキンケイギクがいまだに庭に栽培されていたりする。栽培してはいけないということが認識されていないということが、生物多様性について理解されていないということの端的な例ではないか。プラン以前に、具体的な行政の施策として平地での特定外来種対策が必要。

「レッドデータブック 富山」は平成 24 年度から改定されていない。他県では 10 年ごとに見直しているところもある。生物多様性の現状をまず把握しておくことが大事なのではないか。

(委員等) 生物多様性の保全や野生動物の管理で、色々な取組みがあるが、例えば小さな開発では法的な拘束もない。そこに絶滅危惧種Ⅰ種がいる場合、放っておいてよいのかどうか、そのような判断ができるようにするにはある程度組織的に、例えば生物多様性センターのようなものを置いて専門ごとにアドバイスをするという取組みも必要になってくるのではないか。

(委員等) 山があり川があり、海ができていっているわけで、漁業と生物多様性の保全とは当然非常に密接に絡んでいる。漁業者から言えば、自然のままに放っておいて欲しいというのが本音だが、我々人間が豊かに暮らしていくには、どうしても治水だとか、土砂崩れを防ぐとかいろいろなインフラが必要になってくる。そういったバランスを取ることが、また、バランスを維持していくということが、最終的には一番の最終目標ではないか。

(委員等) 立山地域の特に黒部というところは、原生林そのままの姿が残った最後の秘境と言われていたが、このような自然は実は江戸時代から藩の役人がしっかり見回りをして、守ってきたからこそ、現在にまで残ったもの。自然を大切にしてきた歴史があるからこそ、富山にはこういった手つかずの自然が残ったということを生物多様性の観点からも伝えていきたいと考えている。

(2) 今後のスケジュールについて

委員から出された意見を参考にし、事務局で素案を作成し、第2回富山県環境審議会生物多様性小委員会で審議することとなった。